

天象に関する古川柳に就て

會員 坂元左馬太

梗概 誹風柳多留中17500句に就いて天象に関すると思はれるものを抽出した、結果は甚だ消極的である。

§ 1. 緒

江戸時代の民衆の風俗・習慣・行事・關心事等が最も忌憚なく表現せられて居るものに川柳がある、其時代の人々が天象に如何なる關心を持つて居つたかを知る一つの手段として古川柳を調べた。調査の範圍及方法は種々あるが便宜上“川柳家にとりてバイブルとも謂ふべき”誹風柳多留の西原柳雨氏校訂岩波版(岩波文庫)によつて選び出した、概要次の通りである；

上卷 (昭和5年1月25日發行)

柳多留初編より八編まで句數約5860,

編輯年代 昭和2年酉(1765年)より安永2癸巳(1773年)まで。

中卷 (昭和5年4月25日發行)

柳多留九編より十六編まで 句數約6030,

編輯年代 1776年より前 (十編に安永末の春とあり)

1781年 (十六編に丑正月花角力……………とある)

下卷 (昭和5年5月15日發行)

柳多留十七編より二十四編まで句數約5650,

編輯年代 天明2年のとらの彌生(1782)より寛政辛亥年9月22日(1791)

句數合計 17540句,

天象に関するものは甚だ少いが必ずしも無關心であつたとは斷じられない、それは編者の頭の問題でもあり、又作句に適して居るか否にも關すると思ふからである。

§ 2. 句

抽出した句は次の通り；但し上・170・下は上卷第170頁、下段にあることを示す其他同様。

(a) 明かに天象に關すると思はれる句。

1. 上・170. 下, 雲のやうだと蛤のからを捨て,
2. 中・72. 上, 月あきらかにしてほしは隠れたり,
3. 中・166. 下, 客星の光うしなふ後の月,

(b) 意味よく解らざるもそれらしい句。

4. 下. 20. 下, 三つ星へみせる——,
5. 上. 23. 下, 松の七つの星を能くおぼへ,
6. 中. 160. 上, 鎌倉の方からひかるものがとび,
7. 中. 180. 上, 眞鶴の方へもびかりびかりとび,
8. 下. 179. 上, もの着ぼし客災にあわんとす,

〔物着星〕云々はこの外下. 152. 上, 下. 153. 下, 下. 167. 上に三句ある。

(c) 其他雜

9. 上. 14. 下, 秋かわき先ず七夕にかわきそめ,
10. 上. 70. 下, あまだれを手へ受けさせて泣やませ,
11. 上. 186. 上, そりやにしがふいたぞと出て引ばしより,
12. 中. 40. 上, 成程といつて又見る遠めがね,
13. 中. 122. 上, 爰が火とひなたの火入れおしえられ,
14. 下. 140. 下, 天井へ支へて曲る影法師,
15. 下. 168. 下, どう工夫しても時計のわが餘り,
16. 下. 191. 下, 稻つまはくもをぎつてどつか行,

§ 3. 考 へ

第1の句は皓々たる月の有様がよくわかる。第2の句は恐らく月光による夜空の明るさを云つたものであらう。第3の句の客星は無論彗星であるが、此の年代(1780年頃)には著名なものがない様である。第4の三つ星はオリオンであらう。第5の七つの星は、正月に星に親んだと考へるのは不自然であるかも知れないから遊星の星の事か？ 自分はオリオンと考へたい、第6及第7は調査中でよく真相がわからない、第8のものは或は彗星？ 接近して4つも句のあることは注意を要する(1791年頃)、第9以下は理學的の物への關心を知る爲に掲げた。

この外

上. 13. 下, 明星が茶屋を限りの柄ふくろ,

の明星は〔明星が茶屋〕又は〔明星の茶屋〕(上. 39. 下)である、又上. 12. 下, 流星の内に……………の流星は煙火であらう。

句のほんとうの意味に就ては、川柳家の御教示を得ることを切に御願ひする。(以上)